

Special Essay

医学図書館のお気に入り

消化器疾患情報講座
長尾由実子

久留米大学の医学図書館には特に気に入っているものがある。それは製本機だ。私は数年前からこの製本機をよく利用するようになった。使用料は無料のうえ、簡単に、しかも美しく製本できる。しかし、図書館で製本作業をしている人に一度も出くわしたことはなく、この機械があまり活用されていないのを残念に思う。周囲の人にも勧めているのだが、製本や整理整頓にあまり関心のない人には製本機の利便性が今ひとつぴんとこないのかもしれない。

現在、図書館の製本機は1階書庫の入り口に設置されていて、持ち込み資料をいつでもセルフサービスで製本できるようになっている。製本した資料に表紙をつけてさらに美しく仕上げたい人には、図書館のカウンターで表紙も販売されている(色は2色)。

近年、文献のペーパーレス化が進んでいるが、1本の論文を書き終えるまでには印刷した文献がやはり山積みになってしまう。また、検診を行なった後は検診シートのデータを電子化しているが、それでも、生の検診シートや患者さんの記録写真を廃棄するのは抵抗がある。そこで私はこのような資料を製本し、年度別に整理している。市販のフォルダやバインダーを購入して、紙をいちいち綴じる手間を考えれば、製本に要する時間はあっという間だ。そのうえ、紙が圧縮されて資料がコンパクトに収まるのも嬉しい。

最近、またこの製本機のお世話になった。各講座で発刊している『講座の歩み』は、印刷所に外注し、制作するのが常識となっているようだが、当講座の『Annual Report』は図書館で製本したのである(講座スタッフに配布)。厚さ1.5cmのきれいな本にできあがり、製本機にはとても感謝している。

昨年末、私が携わった書籍が刊行された(『C型肝炎患者が専門医に聞く88の質問』)。これまで科学論文を書く場合は、事実のみを文章にして、読む人のことを考えることは実はあまりなかったのだが、この本は患者さんをはじめとする一般人を対象にしていたため、企画から1年以上をかけてようやく発刊に至った。読者に優しい本を作ることを常に念頭におきながら執筆・編集し、どうすれば理解してもらいやすくなるか、どのフォントを使うか、表紙はどのようなデザインにするのか、図表や挿絵をどこにどう入れるべきかなど、試行錯誤を重ねたためだ。人に配布するものを自分で製本するときも、そのような本作りを心がけている。『Annual Report』も読みやすい構成を考え、製本も美しく仕上がったため、渡したスタッフにも喜ばれた。

図書館の製本機には今後もお世話になる予定である。この製本機のよさを理解する人がもっと増えることを願っている。

図書館で『Annual Report』を
こんなふうに製本しました

